

## 『 信仰による航海 』

使徒の働き 27章 21～44節

## ◆ 元気を出しなさい

暴風に翻弄され、命の危機に瀕し、ろくに食事も出来ず、乗船者の皆が心身ともに疲弊している中でパウロは語りました。【21節】この語り出しは忠告を聞かなかった人々を攻めようとしているものではありません。そもそもパウロが良い港を出帆せず、先ず皆の命を優先的に守るべきであると10節で忠告した背景は、人間の限界を超越する自然界の猛威を甘く見るべきではないこと、積荷や船よりも人の命の重要さを身に染みて知っていたこと、そして何よりも主がこの航海を導いてくださり、悪天候や嵐の困難も主の御手にあるならば、それを受け入れて主の時を待つべきであると言う信仰に基づいていました。つまり主への信頼、信仰に基づいた忠告であったことを皆に知ってほしかったのです。そしてパウロは改めて主が約束してくださったことを証ししました。【22-26節】パウロは昨晚、幻を通して主の使いが語った神様の約束を人々に伝えました。23節では【私の主で、私の仕えている神の御使いが】と証言しています。“私を救い、私が信じ、私が仕えている真の救い主なる神様が”と「この方こそ真の神様である」から信頼して聞いてほしいと言う強調があるように思えます。救い主イエス様が御使いを通してパウロに約束された内容は、船は失われようとも誰一人いのちを失う者はないこと、どこかの島に打ち上げられること、パウロは必ずローマにおいて皇帝の前に立って主を証しすること、そしてこの航海の旅においてパウロを通して乗船者全員が守られることでありました。そしてこの救いの約束をパウロは【元気を出しなさい(22節)】で始めて【元気を出しなさい(25節)】で閉じました。

私たちの人生、そして教会の歩みという航海の旅は必ず困難が伴います。その困難は、主のご計画と御手の中にあるのです。主が与えられた困難を私たちが受け入れ、尚、主に信頼して歩もうとするとき、主なる神様はその人の人生に与えた目的を全うできるように、そして教会に与えてくださった使命と約束を全うできるようにと、必ず救いの道を与えてくださるのです。だから私たちは元気を出して一歩ずつ前に進めるのです。自らの内側には何の力も残っていなくとも、主が救い、守られるという約束があるから元気を出して歩めるのです。それが私たちの信仰なのです。

## ◆ 元気が与えられるとき

良い港を出帆してから14日が経過。船は漂流し続けアドリヤ海を漂っていました。現在のアドリヤ海とは違い、当時はシシリー島とクレテ島の間の海域であり、それは地中海の中央の沖を位置しました。神様に信頼して旅路を委ね、そのオールを委ねて良いと分かっても、尚、人は自らの知恵や力を頼みとしてしまう弱さがあります。【27-30節】アドリヤ海を漂っていた夜のことで、水夫たちは波の砕ける音によって陸地に近づいていることに、いち早く気付いたのかもしれませんが。水深を測ると40m、また少し進んで計ると30m。陸地が近づいていることは喜ばしいことですが、夜では辺りを正確に把握出来ません。このままでは船は座礁してしまうと考えた水夫たちは、碇を降ろして船を停泊させたほうが良いと考えました。恐らく、船長や航海士に現状を報告したことでしょう。しかし航海のプロである水夫たちは碇を降ろす振りをして、船体に巻きつけておいた小船を海に降ろそうとしたのです。彼らは夜も明けぬ暗がりを利用して、自分たちだけ小船で陸に向かおうと考えたのです。主を信頼し、主に委ねるのではなく、どこまでも自らの知恵と力で困難を脱して自らの命を守ろうという行動です。

パウロはすぐに気付きました。【31-32節】パウロは百人隊長に進言して、水夫たちの逃

亡を阻止させました。パウロはなぜ水夫たちの逃亡を許さなかったのでしょうか？もし水夫たちが船を見捨てて逃げてしまえば残された乗船者たちの命が危険にさらされるという現実面もあったことでしょう。しかしここにある本質は、どこまでも主なる神様に信頼し続けると言うパウロの信仰の現われであると思うのです。先に確認したように、パウロは主の使いによる幻によって【あなたがたのうち、いのちを失う者はひとりもありません。神はあなたと同船している人々をみな、あなたにお与えになったのです】という約束が与えられました。この困難続きの航海の旅も主が守られると約束してくださったことへの信頼を保ち続けることを示しているのではないのでしょうか。主の約束をないがしろにして悔むのではなく、すべての乗船者が神様の約束に堅く立って信頼し続ける必要があったのです。主はすべての乗船者を守ってくださると約束して下さっていたのです。

そして、主に信頼して元気を出そうとする者は確かに元気が与えられるのです。【33-37節】この14日日間、嵐に見舞われ漂流し続けた乗船者たちは皆、まともな食事の時間を取ることが出来なかったことでしょう。パウロは「皆で主の約束を信じて、元気を出して困難を乗り越えよう」と食事を勧めます。【あなたがたの頭から髪一筋も失われることはありません】とは、主なる神様がここに乗船している全ての者のいのちを救って守ってくださると言う確認のメッセージです。パウロは主への信頼、信仰を語りながら皆の前でパンを裂きました。そして皆が食事をして元気付けられたのです。ここまで色々なことがありました。そして今やっとここで、皆が主に信頼するほかないと気付かされたのです。すべての乗船者が守られ、いのちは失われないという主の約束の前に、すべての乗船者がその約束を信じて待ち望み、皆で食事をして元気付けられたのです。私たちの旅路を守り導いてくださる主は、信頼する者に必ず元気を与えてくださるのです。

#### ◆ 救いの約束の成就

【38-40節】十分に食べて元気が与えられた乗船者たちは、残っていた積荷の麦を海に投げ捨てて更に船を軽くしました。ようやく夜が明けたころ、確かに陸地に陸地に近づいていることが分かります。それが何処なのか誰にも分かりませんでした。砂浜のある入り江にこの船を接岸できると考え、碇を切り捨て、舵を切れる様に固定していた舵綱を切り解き、残っていた帆を立ち上げました。【41-44節】その入り江に向かって船が進みだしたとき、船はちょうど潮流がぶつかる浅瀬に乗り上げて座礁してしまっただけです。へさきはめり込んで動かなくなり、船尾は激しい波により打ち壊され始めました。船は壊滅状態です。先週見たように、この船にはパウロのほかにも幾人かの囚人が乗船していました。移送のため乗船していたローマ兵たちは、囚人の脱走を防ぐために彼らを先に殺してしまおうと考えるのです。これは至極当然です。伝統的なローマの規律によれば、囚人を任された兵士には確実にその囚人を確保する責任が課せられていました。万が一、囚人が逃亡してしまえば、その責任を厳しく負うことになるのはローマ兵です。しかし、兵士たちのこの提案に指揮官の百人隊長ユリアスは首を縦に振りませんでした。囚人脱走の責任を負って自らの立場や命も危険になるかもしれない状況下で、なぜ百人隊長は部下の提案を退けたのでしょうか。43節によれば【百人隊長は、パウロをあくまでも助けようと思って】と記されております。皇帝直属部隊の百人隊長ユリアスはローマ市民権を持つ囚人パウロを何としてでも皇帝の前に送るべき責務を最優先にしたと考えられます。そしてこれまでのパウロの言動と証しから、パウロは逃亡しないと考えていたことでしょう。しかし何よりも重要なことは、ここに主の約束が成就していることを覚えてほしいのです。主はこの航海が始まる前から、パウロは必ずローマに到着して証しすることを約束されておられました。この航海の困難の中でも、パウロは必ず皇帝の前に立つことを約束されました。と同時に乗船者の全ての者のいのちが守られることを主は約束してくださいました。それはパウロや兵士たち、乗組員たちのみならず他の囚人たちも含めてです。船が壊滅したこの困難においても誰の命も失われることはないのです。泳げる者は自力で陸に向かい、その他の者

たちも板切れや船の一部に掴まって、船は失われましたが、すべての乗船者が陸に辿り着いたのです。かれらが無事に辿り着いた地はマルタ島と呼ばれる島でありました。

◆ まとめ・お勧め

私たちの人生、教会の歩みという航海では確かに困難に直面します。そしてその困難さえ、私たちの信仰を強めるために主が備えたものであることを先週確認いたしました。私たちは信仰によってその困難を受け入れ、尚、主に信頼して教会に与えられた使命と約束のために歩み続けようとするとき、主はこの航海の旅路を確かに守ると何度でも約束して語ってくださるのです。元気を出して進みなさいと語ってくださるのです。私たちの内側から、もはや元気は出ないとしても、主が元気を与えてくださるのです。自らの知恵、能力、努力ではいずれ倒れてしまうでしょう。しかし、主がその約束のために導いてくださると信頼して歩みを進めるとき、私たちに必要な元気を主が与えてくださるのです。そして主はその約束を必ず成就してくださる真の神様なのです。

私たちの人生、そして教会の歩みという航海の旅を、ただひたすらに主に信頼して進み続けたいと思うのです。